J. M. Coetzee が描く共感的想像力の可能性
―*The Lives of Animals* の文学的読解*―

金内　亮

要旨

J. M. Coetzee は、*The Lives of Animals* という講演において、Elizabeth Costello という登場人物を通して共感的想像力という概念を提示した。この概念には、作者 Coetzee の動物論の表明には留まらないものがある。しかし、従来の研究においては共感的想像力が持つと思われる文学的可能性が見過ごされてきた。したがって、本論は従来の研究を二種類に分けて整理し、それらの問題点を乗り越え、共感的想像力が持つ可能性を明らかにすることを試みる。一つ目は、*The Lives of Animals* を単に Coetzee の動物論の表明であると見なす研究であり、本論では Peter Singer の主張に特に着目する。二つ目は、共感的想像力の限界に注目する研究であり、本論では Sam Durrant の主張に特に着目する。このような主張に対し、本論は共感的想像力を行使する主体の場に着目することによって、共感的想像力の可能性を考察する。本論が提示する立場は、*The Lives of Animals* を文学作品として改めて読み直すものである。

キーワード：J. M. Coetzee，*The Lives of Animals*，*Elizabeth Costello*，共感的想像力

1. 序

John Maxwell Coetzee（1940-）は、1997 年に“The Philosophers and the Animals”と“The Poets and the Animals” という二つの講演を行った。その講演は Elizabeth Costello という登場人物が講演を行うというものであり、聴衆は Coetzee の講演の中で Elizabeth が講演を行うという構造に戸惑った。この点については、例えば Derek Attridge が参加者として抱いた困惑について書き記している（Attridge 193）。

この講演は後に *The Lives of Animals*（1999）として出版され、その後八つのレッスンから成る *Elizabeth Costello*（2003）という書物の第三、第四レッスンとして織り込まれた。しばしば、これらは研究者によって Coetzee 自身の動物論と結び付けて考えられてきた。

しかし、この講演、そこで提示される共感的想像力という概念には作者 Coetzee の動物論の表明に留まらないものがある。本論では、まず二つの講演で提示された動物論、

そして共感的想像力について述べる。次に、この講演が研究者によってどのように捉えられてきたかを主に二つの立場に分けて概観し、それぞれの代表として Peter Singer と Sam Durrant の議論に特に着目する。その後、Coetzee の共感的想像力が持つ射程を、共感的想像力を行使する主体の場に着目することによって再検討することを試みる。

2. Elizabeth の動物論と共感的想像力

本節では *The Lives of Animals* で展開されている動物論と、その中で提示される共感的想像力を検討する。

Elizabeth はその講演で、第二次世界大戦中に強制収容所で行われた大量虐殺と、今日における動物の屠殺とを重ねて論じる[1]。彼女によれば、今日の動物の屠殺は、殺すという目的のために動物を生み出し続けているという点で第三帝国以上におぞましい。そして、今日においては食肉工場や動物実験を行っている施設などがそれに該当するが、我々はそういった企てに囲まれているのである。

Elizabeth は、人々がそのような事実に対して無知でいることを批判する。しかし、収容所の存在は知られていないわけではなかった。第二次世界大戦下のドイツ人は、そのような場所の存在をあえて知ろうとしなかった、もしくは自分たちは知らないと見せかけていたのである。もちろん、そういった態度は護身のためであっただろうが、Elizabeth によれば、「ある特定の世代のドイツ人たち」が意図的な無知を行使したが故に人間性を失ったのだと述べて批判する（*The Lives of Animals* 20）。彼女はその後、その日の朝に Waltham の街を車で巡ったことに触れ、そこでは薬物実験場や養殖場や屠殺場を見かけなかったが、そのような施設が存在していると確信していると述べる。そのような施設は周囲に存在しているのに、ある意味で人々が知らないだけなのだと彼女は指摘する（21）。彼女は、動物に対して行われていることに対して人々が目を向けないことを批判しているのだ。

このような意図的な無知と対をなす概念が、共感的想像力なのである。Elizabeth はこの概念を提示するに際して、アメリカの哲学者 Thomas Nagel の論文 “What Is It Like to Be a Bat?” を批判することから始める。Elizabeth は彼の著書から次の文を含む一節を引用する。

> Insofar as I can imagine this (which is not very far), it tells me only what it would be like for me to behave as a bat behaves. But that is not the question. I want to know what it is like for a bat to be a bat. Yet if I try to imagine this, I am restricted by the resources of my own mind, and those resources are inadequate to the task. (*The Lives of Animals* 31)

なぜ Nagel がこのように述べるのか、Elizabeth は彼の主張について次のように説明する。

“What is it like to be a bat? Before we can answer such a question, Nagel suggests, we need to be able to experience bat-life through the sense-modalities of a bat” (33). 人間とコウモリは根本的に異質な存在であり、人間はコウモリの感覚様式を通してコウモリの生を経験することができないため、コウモリであるとはどのようなことかという問いに答えることはできないというのが Nagel の主張なのである。しかし、彼は間違っていると Elizabeth は述べる。Elizabeth は、彼のように人間と動物との間に境界線を引く態度を認めることができない。つまり、彼女は理性の有無などを理由にして人間と動物とを区別するような哲学を批判しているのだ[2]。

では、ここで Elizabeth が批判している哲学とはどのようなものだろうか。Elizabeth は哲学的な言葉について次のように述べている。

> It is the language of Aristotle and Porphyry, of Augustine and Aquinas, of Descartes and Bentham, of, in our day, Mary Midgley and Tom Regan. It is a philosophical language in which we can discuss and debate what kind of souls animals have, whether they reason or on the contrary act as biological automatons, whether they have rights in respect of us or whether we merely have duties in respect of them. (22)

そして、Elizabeth は Aquinas に問うたならば神の本質は理性であると答えるだろうと述べ（22-23）、Plato や Descartes もまた、宇宙は理性の上に成り立っているという主張を同じくしていると述べる（23）。そして、そのような主張においては、理性を持つ人間は宇宙を動かしている法則を理解できるのであり、動物は理性を持たないのでそれを理解することができない。このような態度に彼女は反対するのである。Elizabeth は、動物が理性を持たないという主張そのものに反対したいのではない。彼女は「理性を宇宙の第一原理として承認する理性」という理性のトートロジー性を批判し（25）、動物は意識を持たない、「だから」動物を人間の目的に合わせて自由に用いて良いのであるという人間中心主義的な考え方を批判しているのである[3]（44）。

Elizabeth は講演の聴衆にとって馴染みのある哲学的な論法に一部頼りはする。だからこそ彼女の講演原稿には脚注が付されているのであり（26）、作中で英文学科の Elaine Marx が指摘しているように、人間と動物とを区別する推論に反論することができるのである（55）。しかし、彼女は基本的にはそれを退け、作家としての言葉でもってこの問題を論じようとするのである[4]。そして、それこそが作家である自分がこの場に呼ばれた理由であろうと述べる。権利や義務、人間と動物の魂の違いについて話してほしいのであれば、人々は Elizabeth ではなく哲学者を呼ぶべきだったのだ。

したがって、Elizabeth は哲学的な言葉でもって人間と動物との間の差異について考えるのではなく、作家としての言葉でもって人間と動物の共通点を模索する。その答えは、

充足した存在という表現で示される。彼女は次のように述べる。

> To be a living bat is to be full of being; being fully a bat is like being fully human, which is also to be full of being. Bat-being in the first case, human-being in the second, maybe; but those are secondary considerations. To be full of being is to live as a body-soul. One name for the experience of full being is *joy*. (33)

充足した存在を享受しているという共通点、身体と魂が結合した存在として生きているという共通点がある以上、動物に対して心を閉ざして残虐な行為を働いているという現状に目を背けてはいけないというのが彼女の主張である。

このように、彼女は作家としての言葉でもって人間と動物との共通点を示した。その上で、彼女は共感的想像力という概念を提示する。彼女は半ば唐突に死について話し始め、自分が死体であるということがどのようなことであるかわかると主張する（32）。彼女によれば、自分自身の死についての知識は、抽象的なものではなく、具体的なものなのである。“For a moment we *are* that knowledge” と彼女は述べる（32）。そして、“if we are capable of thinking our own death, why on earth should we not be capable of thinking our way into the life of a bat?” と問う（32-33）。このようにして、彼女は他者の生を具体的に理解するということに向かって議論を進めているのである[5]。彼女は収容所を再び引き合いに出して次のように述べる。

> The horror is that the killers refused to think themselves into the place of their victims, as did everyone else. . . . In other words, they closed their hearts. The heart is the seat of a faculty, sympathy, that allows us to share at times the being of another. Sympathy has everything to do with the subject and little to do with the object, the ‘another,’ as we see at once when we think of the object not as a bat (‘Can I share the being of a bat?’) but as another human being. (34-35)

つまり、先にも述べたように共感的想像力は意図的な無知と対になる概念なのである。その共感の対象には、動物も含まれる[6]。そして、対象の生の中に入って考える試みが共感的想像力なのであり、このようにして行使者は他者の存在を共有することができるのである（ここで、共感的想像力によって得られる知が主観的なものであると述べられている点に留意したい）。Elizabeth は、共感的想像力の範囲に限界は無いと述べている（35）。その証左として彼女は、自らの著作において、現実には存在しなかった Marion Bloom（無論、James Joyce が生み出した架空の人物である）の存在の中に入って考えることができたという事実を挙げる（35）。そして、架空の存在の中に入って考えることができるのな

らば、充足した存在を共有する生き物の中に入って考えることは可能であるはずだ、というのが彼女の主張である。このように、作家は共感的想像力を強力に行使することのできる存在であると捉えられている[7]。

そのような作家としての言葉について、彼女は "The Poets and the Animals" の中で主張を展開している。この中で彼女は Ted Hughes のジャガーについての詩を取り上げて論じている。彼女が Hughes の詩を選んだ理由は次のように述べられている。

> With Hughes it is a matter — I emphasize — not of inhabiting another mind but of inhabiting another body. That is the kind of poetry I bring to your attention today: poetry that does not try to find an idea in the animal, that is not about the animal, but is instead the record of an engagement with him. (51)

Hughes の詩は、読者に動物の肉体の中で生きることを求める。このことはすなわち、Hughes の詩が読者に共感的想像力を行使するよう促しているということを意味する。そして、そのような詩的な関わりにおいて、その対象物はまったく重要ではないと彼女は述べる（51）。なぜなら、動物との間に流れる感情を我々は動物から引き出して言葉にするのであり、その詩は完全に人間の秩序に組み込まれるからである。したがって、そこに動物の入る余地はない。先に触れたように、共感的想像力が主観的なものであるというのはこのような理由からである（この点については第四節の冒頭でも触れる）。

作家としての言葉を用いて読者に共感的想像力を行使させることに成功しているのが Hughes の詩である。Elizabeth によれば、彼の詩的創造によって、読者は彼の詩を読むときにジャガーになるのである（53）。このように、生きた強烈な存在を言葉にすることができるのが、作家としての言葉なのである（65）。しかし、Elizabeth にはそのような能力が欠けているということが暗示される（65）。彼女が自分自身の表現や作品ではなく、Hughes の詩を用いるのもそのためであると言える。作家としての Elizabeth については本論の最終部で論じる。

3. 共感的想像力への批判

本節では、*The Lives of Animals* が研究者によってどのように受け止められてきたのかを検討する。

The Lives of Animals は、しばしば Coetzee 自身の動物論の表明としてのみ捉えられてきた。例えば Eliza Aaltora は、Coetzee が本作や同時期に発表されたフィクションである *Disgrace*（1999）の中で描いている倫理が、従来の動物倫理論とは一線を画すものであると述べた（119-20）。Michael Funk Deckard と Ralph Palm はもう少し慎重に本作を論じている。彼らは *Elizabeth Costello* の読者が第一に抱く疑問は、Elizabeth は Coetzee の意見

を直接代弁しているのか、それとも Coetzee は彼女からある程度距離を取っているのだろうかというものであると述べている[8]（337）。しかし、彼らもまた、Elizabeth の講演を動物論の枠組みで捉えている。彼らは *Elizabeth Costello* の第三、四レッスンにおいて提示された動物への共感というテーマが、最終レッスンに至るまでには消え失せている点を指摘しているのである（349）。

加えて、この講演を動物論としてしか受け止めなかったがために次のような批判も出ている。ダナ・ハラウェイは『伴侶種宣言』の中で、動物トレーナーであり言語哲学者でもあるヴィッキー・ハーンの言説や、その実践を紹介している。それによれば、ハーンはクリッカートレーニングや動物の権利擁護言説を激しく批判し、人間と伴侶動物の差異を還元不能であると認識した上で、それを横断するコミュニケーションを問題とするのである。ハーンは、例えば犬の服従競技における厳しいトレーニングを支持する。なぜかと言えば、ハーンにとっては「権利の起源は、ばらばらの予め存在するカテゴリー的アイデンティティにあるのではなく、互いに心身を捧げた関係性の中に存する」からである（81-82）。したがって、ハーンの議論において重要視されるのは、特定のトレーナーと特定の犬との間の倫理的な関係となる。彼女は、そのようになされるトレーニングのヒエラルキー的規律によって可能になる種横断的な達成を愛しているのである。このようにハーンの実践を紹介した上で、Coetzee が講演の中で提示しているような考え方は「ハーンの枠組みにおいてまったく意味をなさない」とハラウェイは述べた（79）。ハーンは人間と伴侶動物との間の差異を前提にしているので、Coetzee が Elizabeth を通して提示した議論とは当然枠組みを異にするだろう。これは、Coetzee の講演を動物の権利擁護言説と同種のものであると見なし、その中で動物との具体的な関係性について述べられていないという判断から生まれた批判である。

しかし、Elizabeth の講演において動物との直接的な接触について述べられていない点についての疑問は、既に作中でなされている。Elizabeth の息子 John は次のように述べている。 “If she wants to open her heart to animals, why can’t she stay home and open it to her cats?” (38). この点には Coetzee の講演に応答論文を寄せた Barbara Smuts も着目していて、Elizabeth は動物を飼っているにも関わらず、なぜ実生活における動物との関係を語らないのかが謎であると述べている。そしてその点を講演における欠落であると見なし、自分自身と動物たちとの関わりについて述べることで補おうと試みている（107-08）。

本論では、このような研究の中で特に Singer のものを取り上げる。彼は講演への応答論文の中で次のように述べている。 “Costello can blithely criticize the use of reason, or the need to have any clear principles or proscriptions, without Coetzee really committing himself to these claims”(“Reflections” 91). この読解において Singer は、Coetzee は Costello の主張から距離を取っているのだという解釈をしていた。しかし、彼は後に Karen Dawn と共に著した論文の中で、例えば Cora Diamond が試みたように Coetzee の講演を総合的に

読解することを、Coetzee の動物への関心を捉えるにあたっては不十分な読み方であると批判する（Dawn and Singer 110）。そして、*The Lives of Animals* 以降の作品において作者 Coetzee が作中にコミットしている要素が強まっている点、Coetzee がインタヴューで作中と同種の発言をしている点を挙げ、講演での Elizabeth の発言を Coetzee 自身のものであると考えて差し支えないであろうと主張した（109-10）。

Elizabeth の講演は Coetzee が自分の意見を表明するために著したものであるという主張を完全に否定することはできない。現に、Elizabeth の発言は作者のものであると断定する Singer の主張を更に裏付けするような Coetzee 自身の発言が、Singer の論文が刊行された後にも発表されている。しかし、Singer と Dawn による Diamond 批判のように、*The Lives of Animals* を文学作品として総合的に読解することを否定するべきではないだろう。Elizabeth の講演を単に Coetzee 自身の意見表明であると見なしてしまっては、本作が持ち、更に Coetzee の作品群に共通して見られる重要な要素を見落とすことになる。この点については次節で述べるが、その前に共感的想像力に関する他の研究を取り上げる。

Coetzee が Elizabeth を通じて提示した共感的想像力に対する別の観点からの研究がある。それは、共感的想像力の限界という観点である。Deckard と Palm は、Coetzee はフィクションという形式でもって、Elizabeth が言い表すことのできないものを表すことに成功していると述べている。Coetzee が描く登場人物は変わらないままでいるかもしれないが、例えば Elizabeth に対する周囲の反応を描くことを通じて、すなわち Elizabeth Costello という人物ではなく *Elizabeth Costello* という書物を通じて読者は変わることができるという主張である（Deckard and Palm 343）。同種の描写、すなわち Elizabeth 自身の能力には限界があるのだが、彼女の作品は読者を変えているのであるという描写を Coetzee 自身も行っている。彼の短編作品である “As a Woman Grows Older” において、Elizabeth の娘 Helen は次のように言う。

> The answer you will not give — because it would be out of character for Elizabeth Costello — is that what you have produced as a writer not only has a beauty of its own — a limited beauty, granted, it is not poetry, but beauty nevertheless, shapeliness, clarity, economy — but has also changed the lives of others, made them better human beings, or slightly better human beings.

つまり、Elizabeth が失敗しながらも探究し続ける姿を描くことによって、Coetzee（もしくは Elizabeth）は成功しているとする議論である。

この種の議論において最も注目に値するのは Sam Durrant のものである。彼は次のように述べている。“Costello’s assertion that ‘there are no bounds to the sympathetic imagination’

is turned in upon itself in Coetzee's fiction, which one might describe as acts of sympathetic imagination that continually encounter their own bounds" (119). そして、共感的想像力の試みに失敗してこそ、その失敗の場において他者の根本的な他者性を認識することができるのであると指摘した（120）。このように、Durrant は基本的には共感的想像力の失敗に着目しながらも、その失敗の場において何らかの可能性が開かれているのではないかと問うている点で優れている。しかし、共感的想像力の試みは失敗しているのであろうか。Coetzee が描いているのは共感的想像力の不可能性であり、それを読者が読解し、その不可能性を通じて他者性を学ぶことしかできないのであろうか。

Durrant は、Coetzee の複数の作品において、主人公がほとんど常に社会的、人種的に特権的な立場にいること、そして彼らの共感的想像力の対象は社会的にハンデを負っていることや抑圧されている点に着目している。そして、抑圧された彼らは共感的想像力など行使することができない環境に置かれている点を指摘し、それを共感的想像力の限界という主張と繋げている[9]（Durrant 119-20）。だが、それは共感的想像力の限界を示すための要素というよりも、共感的想像力の試みにおいては当然のものと言うべきであろう。Nancy Armstrong は、現代小説においてなぜ作家は傷ついた存在、人間以下とされている存在、人間として十分に自立できていない存在を描いて読者にそういった存在への共感を促すのかという問題提起から出発し、Coetzee の *Life and Times of Michael K* を分析して次のように述べている。 "At the present moment, it seems to me, only a hypothetical or fictional phenomenology can engineer imaginary links between the first person and the third, a link that doesn't dehumanize cognitive activity that operates along the biological substratum" (462). そういった試みは仮想的な、虚構の記述においてのみ可能なのであり、そのようにして現代小説は、現代において必要とされている種の共感を読者に経験させることができるのである (Armstrong 464)。故に、Coetzee の共感的想像力の対象が社会的弱者の立場に置かれているということは、Coetzee が描く共感的想像力が現代的な問題意識に沿っているということを意味するのである。

また、Durrant は、共感的想像力の対象と身体を触れ合うことがある種の茫然自失の状態、意思の停止を引き起こしている状況を分析し、Jacques Lacan を援用して、そのような夢見の状態においてこそ他者の傷に触れること、自己と他者とが出会うことができるのであると読解している（120-24）。その夢見の状態において他者と出会うことができ、そのような描写を Coetzee の作品群の中に認めることができるのなら、Coetzee は共感的想像力の失敗ではなく、そのような主体の場を描き出すことに成功していると言えるのではないだろうか。更に、共感的想像力とはその種の主体の場を志向するものであるとは言えないだろうか。では、その種の主体の場とはどのようなものであるだろうか。次節ではこの点を検討する。

4. 共感的想像力を行使する主体の場

Coetzee が提示した共感的想像力を理解するにあたって肝要な点は、それが主観的な知であることを重要視しているというものである。第二節において Elizabeth による Nagel 批判に触れたが、これとほとんど同種の記述が Coetzee と精神科医 Arabella Kurtz との共著 *The Good Story*（2015）に見られる。彼は次のように述べている。“I disagree with Nagel. I think that by a strenuous effort of sympathetic projection one can reach a flickering intuition of what it is like for a bat to be a bat. But this does not amount to the claim that one can have intuitions of what it is really like for a bat to be a bat” (136). この主張によれば、共感的投影（共感的想像力と同じ意味で用いられている）を行使することにより、我々はコウモリにとってコウモリであるということがどのようなことであるのかについての直観を得られるのである。しかし、そのような知識は客観的な事実ではない。我々が本当にコウモリになれるわけではないからだ。ここでは意図的な無知とは異なり、対象を知ろうとする主体の態度こそが重要なのであって、そのような知が客観的事実である必要はない（そもそもそのような事実など知り得ないというのが Nagel の結論であって、その点においては Coetzee も主張を同じくしている）。

そして、そのような主観的な知を重要視していることが、以下で述べるように、共感的想像力を行使する主体の場の表象にも現れている。John は、Elizabeth を厳しく非難する Norma に対して次のように言う。“Still, isn’t there a position outside from which our doing our thinking and then sending out a Mars probe looks a lot like a squirrel doing its thinking and then dashing out and snatching a nut? Isn’t that perhaps what she meant?” (*The Lives of Animals* 48). この John の発言に対し、Norma は人間の営為の外部に位置してまるでリスの行動を観察するかのように人間を観察する立場の存在を即座に否定する[10]。しかし、現に Elizabeth は動物の理性を測定しようとする科学実験の人間中心主義的態度を批判し、次のように述べている。“It values being able to find your way out of a sterile maze, ignoring the fact that if the researcher who designed the maze were to be parachuted into the jungles of Borneo, he or she would be dead of starvation in a week” (62). このように、理性を絶対視する理性は、理性の外側から理性を眺めてみることをしないというのが彼女の主張なのである。

Coetzee 自身も同種の主張をしている。彼は 2006 年に早稲田大学で開かれた「国際サミュエル・ベケット・シンポジウム東京 2006 ― Borderless Beckett」において“Eight Ways of Looking at Samuel Beckett” という特別講演を行っている。そこにおいて彼は「私たちが類人猿と呼ぶ生き物」に対して行われる動物実験の情景を描き出す。ここでは人間が、動物に対して思うままに実験を行うことができる。ここで Coetzee は、人間が実験の対象である動物に対して取っている立場と同じようなものとして、神（もしくは Godot）の存在を思い描いて人間の外部に位置付ける。すなわち、人間の行動を外部から観察することのできる存在を仮定するのである。そして、彼はそのような神の不完全性を指摘

する。 “he can never know what it is to be me” と彼は言う（28）。つまり、人間が科学的な枠組みの中で動物に対してどれほど合理的な実験を行おうと、動物という存在を十分に理解することはできないという主張なのである。ここで Coetzee が批判している科学的、理性的な態度に対して Elizabeth が作家としての言葉で提示した態度が共感的想像力であるということは、ここまで確認してきた通りである。彼女のように、人間の理性の外の立場を想定することは、第二節で言及したような哲学や上で述べたような科学において絶対視されている理性を相対化することに繋がるのであり、そのような態度は動物に対して人間中心主義的な立場を取らないことに繋がるのである。

では、そのような立場を志向することが開く可能性はどのようなものであるだろうか。以降、共感的想像力が理性の外部を志向しているという点を足がかりにして、Coetzee の他のテクストを参照しながら、その可能性について考察する。Coetzee は、*Giving Offense* の中で Erasmus の *The Praise of Folly* を読解している。Erasmus は、ルター派と教皇派との争いから距離を取っておきたかった。Coetzee によれば、Erasmus は次のように考えた。“In his view, the escalating violence of their rivalry made the two sides more and more alike, even as they more and more loudly asserted their difference” (83). この判断に従って Erasmus はどちらの側に味方することも拒んだのであるが、それ故に彼は両陣営から非難されることになってしまい、不遇の晩年を過ごす。この彼の立場は非政治的であり、争いを拒まぬ彼個人の性格によるものであったのだろうか。そうではなく、彼の立場は政治的なものであったと Coetzee は断言する（83）。Erasmus は、その著作 *The Praise of Folly* において、自身が取ったような立場を、争いの外部に身を置いて両者を批判することができるような立場として描いた。このように、政治的争いの内部にありながら同時に外部にある立場、 “a position in-but-not-in the political dynamic” を理想とした Erasmus の著作について、Coetzee は分析していくのである（84）。

そのような立場は痴愚、すなわち Moria 的な狂気こそが可能にするのである。そのような立場にある者が持ちうる権威の別の名は、真理である（93）。Coetzee は次のように述べる。“Madness of the second type, then, is a kind of ek-stasis, a being outside oneself, being beside oneself, a state in which truth is known (and spoken) from a position that does not know itself to be the position of truth” (95). つまり、自己の外へと出たその場において（したがってそれは狂気と呼ばれることになる）、真理は得られるのである。Michael Marais は、そのような狂気の場と文学の場との間に一致を見ている（84）。どちらも、政治的な力学の内部にありながら、同時に外部に位置しているのである[11]。Marais が指摘したように、Coetzee が論じた Erasmus 的な立場と文学的な場との間に共通点を見出すことができるなら、次のように述べることができる。すなわち、Erasmus が論じた狂気におけるような、自己の外部においてある種の真理に到達することができるという態度は、自己でありながら同時に自己の外部、すなわち他者の生の中に入って考えようと試みる共感的想

像力もそれを共有しているのである。

Anthony Uhlmann は、Coetzee の *The Master of Petersburg* を分析する中で次のように指摘している。Uhlmann によれば、Dostoevsky を主人公とするこの作品の中で Erasmus 論における “in-but-not-in” という場を探究する試みの結果、作品中の語り手の言葉が Coetzee 自身の言葉とは見なされなくなるような瞬間が訪れる。そのような瞬間に小説が批判的な力を持つのであり、“non-position” という場からの語りは真実を語ることへと繋がる。このように、Coetzee は Dostoevsky の創作の過程を描きながら、作家が自己の外部へと出る可能性を描写しているのである（Uhlmann 62）。この指摘に従えば、Coetzee は共感的想像力というテーマにおいてだけでなく、その文体のレヴェルにおいても “in-but-not-in” の場を模索しているということになる。そのような場は、先の Marais の指摘でも触れられていたように、文学的な場である。そのような場を共感的想像力も志向しているのであると見なす本論は、Singer らとは異なり *The Lives of Animals* を文学的に読解することになる。そして、ここまでで挙げた研究が Coetzee の他の作品に言及していることからも推察されるように、このような態度は Coetzee の複数の作品において観察されるものなのである。Coetzee がその作品において、しばしば作家を描く理由のひとつも、この点にあると見ることができるだろう。

作家である Elizabeth が提示した共感的想像力が目指しているのはこのような場ではないだろうか[12]。自己でありながら、自己を抜け出て他者の中に入って考える、そのような場の探究が共感的想像力なのである。哲学的な言説が生み出す理性対動物といった対立の内部にいながら同時に外部に位置し、両者に対して真実を知ることのできる立場の探究[13]。しかし、先の引用において述べられていたように、そのような場にある者は自分が真実の場にあると認識することはない。したがって、後に見るように、共感的想像力は終わりなき試みとなるのである。

5. 結論

Coetzee は “Eight Ways of Looking at Samuel Beckett” の中で “What is missing from Beckett’s account of life? Many things, of which the biggest is the whale” と述べて他者性としての鯨に言及し、鯨の中に入って考えない Beckett を批判した（21）。田尻芳樹は、「『サミュエル・ベケットを見る八つの方法』を読む」において次のように述べている。「ここでクッツェーは、人間とは相容れない別の存在である（「別の言説の宇宙」に存在する）動物の〈他者性〉を想像する「勇気」をベケットは欠いていた、というきわめて大胆な批判を込めているように見える[14]」(44)。Coetzee によるこの Beckett 批判から、Coetzee が作家として他者の生の中に入って考えることを重視していることが窺える。

Elizabeth もまた他者性を重視している。彼女はインタヴューにおいて “It is the otherness that is the challenge” と答えた（*Elizabeth Costello* 12）。ここまで見てきたように、

共感的想像力とは、他者性と向き合おうとする試みであった。

そのような Coetzee（Elizabeth）の文学的試みは、*Elizabeth Costello* 第八レッスンにおいて比喩的に描かれているように思われる。Elizabeth は広場の門を通り抜けたいと思っているのだが、そのためには法廷において信条について述べ、陪審員から認められなくてはならない。その門は彼女専用のものであるようだが、彼女は門を通れない運命にあるだろうことを知っている（*Elizabeth Costello* 196）。この世界は陳腐な紋切り型に満ちていて、文学のテーマパークであると Elizabeth は感じる（208）。例えば、広場の風景はまるで絵に描いたようであり、法廷はカフカや『不思議の国のアリス』を思わせる（223）。彼女はそのような文学性に不満を抱くのだ（204, 206, 215）。

彼女がこの世界において気味悪く感じている理由について、次のように語られている。"That is, finally, what is so eerie about this place, or would be eerie if the tempo of life were not so languid: the gap between the actors and the parts they play, between the world it is given her to see and what that world stands for" (209). すなわち、見た目とそれが意味しているものとのギャップが彼女に不気味さを感じさせているのである。この問題は *Elizabeth Costello* 中の "Postscript" においても展開されている。ここで Elizabeth はチャンドス卿の夫人であるという設定が与えられていて、彼女は Francis Bacon に手紙を書いている。そこでは、何を言っても別のことに意味が移ってしまうということについて Elizabeth が思い悩んでいて、"*Always it is not what I say but something else*" と彼女は書く（228）。なぜ彼女がそのような点で苦しむのかと言うと、彼女は自分が高齢であり、本当に思ったことしか言わず、それ以外のことを言っている時間など無いと考えているからである（*The Lives of Animals* 18）。

彼女は法廷で認められることができず、したがって門を通ることができない。彼女は門番に、自分は作家として門を通る見込みはあるかどうかと問う。門番は答えず、彼女は自制心を失うが、そこで彼女は次のような幻想を見る。

> She has a vision of the gate, the far side of the gate, the side she is denied. At the foot of the gate, blocking the way, lies stretched out a dog, an old dog, his lion-coloured hide scarred from innumerable manglings. His eyes are closed, he is resting, snoozing. Beyond him is nothing but a desert of sand and stone, to infinity. It is her first vision in a long while, and she does not trust it, does not trust in particular the anagram GOD-DOG. *Too literary*, she thinks again. A curse on literature! (224-25)

この幻想において、門のこちら側とあちら側の間には傷ついた犬が寝転んでいる。本来ならば、読者は Elizabeth がこの傷ついた動物に対して共感的想像力を行使すると考えるだろう。しかし、そのような直接的な関わりはここでは閉ざされている。この犬は即座

に “GOD-DOG” というアナグラムを彼女に思い起こさせ、その陳腐な文学性が彼女に反感を抱かせる。このように、目の前の犬もまた、その意味を変えていくのであり、彼女はそのことに耐えられない。

しかし、Elizabeth 自身が繰り返し述べているように、作家とは自分が書いている以上のものを読者に教えるのである（*The Lives of Animals* 37, 53）。そうであるならば、作家である Elizabeth もまた、ある言葉が別のものを即座に意味してしまうような世界から逃れることはできない。彼女は文学に対して呪いあれと考えているが、彼女は文学から逃れられないのである。その状況は彼女を苦しませる。彼女は John に対して、 “I no longer know where I am” と言った（*The Lives of Animals* 69）。彼女は自己でありながら、自分がどこにいるのかわからない。しかし、第四節において述べたように、 “in-but-not-in” という場、内部にありながら同時に外部に存在するような場において、真実を語り得る存在は自分がそのような場にいると認識することはないのである。そして、そのような場はまさに文学的な場なのであるという点については先に述べた。このように、*Elizabeth Costello*（*The Lives of Animals* を含む）という作品は、作家についての物語でもあり、Coetzee は作家としての Elizabeth の主体の場を描いているのである。

本論は、Coetzee が提示した共感的想像力が描き出している可能性について問うてきた。このような文学的可能性は、*The Lives of Animals* を Coetzee の動物論としてのみ見なすような読解では捉えることができない。そして、このような研究は、Coetzee が他の作品で作家を通して描いている態度を理解することにも繋がるのである。

註

1 この二者を並べて論じたことで Elizabeth は Abraham Stern から非難される（*The Lives of Animals* 49-50）。この非難について、中井亜佐子は Stern が所属する共同体の言語と Elizabeth の言語との相容れなさという観点から分析を加えている（中井 273）。

2 Elizabeth の講演後に開かれるディナーの場においても、人間と動物とを区別する基準について議論が展開される。Wunderlich や John は、不潔さや羞恥心の有無でもって人間と動物を区別する（40）。Olivia Garrard は性行為の相手にするかどうかで区別する（40）。いかに人間が自らと動物とを区別してきたか、いかに「人類学機械」を作動させてきたかについてはジョルジョ・アガンベンの『開かれ』を参照。この点に関して、デリダは『来たるべき世界のために』において、動物をひとくくりにして「人間」対「動物」という図式化を行うことを批判し、「いくつもの動物が存在するという事実」、「人間もそうした動物のひとつ」なのであるということを指摘している（93）。動物と人間との間に差異が無いと言うのではない。「人間と人間でないものとのあいだにひとつの対立があるのではなくて、生けるものの様々な組織構造のあいだに、たくさんの差異が、異質性が、差異的構造があるのです」と彼は言う（97）。

[3] このような批判は Coetzee による西欧哲学批判の一部である。David Attwell の指摘によれば、彼によるこの種の西欧哲学批判は、最初の長編小説である *Dusklands*（1974）から既にリアリズムへの抵抗という形で姿を見せていた（*Life of Writing* 62）。

[4] 哲学的な言葉と作家としての言葉を対立させる Elizabeth の手法は、Plato の *Republic* と関連付けて論じられることがある。Stephen Mulhall は、Cora Diamond、Onora O'Neill、Stephen Clark らが提示した議論を検討し、Elizabeth がここで提示している図式が時代遅れなものではなく、現代的な議論に貢献しているのであると位置付けている（Mulhall 18）。

[5] Elizabeth による Nagel への批判や死についての議論に際して、義理の娘 Norma は不満の意を繰り返し示す（32）。また、息子の John は母 Elizabeth の判断や議論が不適当なものであると感じ、Norma は支離滅裂なものであると非難している（36）。このように、Elizabeth の主張は作中で多くの批判を受けている。

[6] この主張は Coetzee 自身のものでもある。彼は *The Good Story* において次のように述べている。"Broadly speaking, I see sympathy as an inborn faculty in human beings which may or may not grow, may or may not atrophy, may or may not be fostered; I also see it as capable of extending itself beyond fellow human beings to other forms of life" (134).

[7] Coetzee は 2004 年のインタヴューで次のように答えている。 "There is a strong argument to be made that it is impossible for a human being to inhabit the consciousness of an animal, whereas through the faculty of sympathy (fellow-feeling) it is possible for one human being to know quite vividly what it is like to be someone else. Writers are reputed to possess this faculty particularly strongly" ("Animals, Humans, Cruelty and Literature: A Rare Interview with J. M. Coetzee").

[8] このように、Elizabeth と Coetzee の距離というものが本作を論じる上で重要な点となっている。Lucy Graham がこの点についての研究を手際よくまとめて紹介している（217-18）。

[9] Coetzee は *Life and Times of Michael K* の草稿の中で、彼のような知的エリートが被抑圧者の物語を描くことの不可能性について悩んでいる（Attwell, *Life of Writing* 134）。このような苦悩が、Coetzee 作品の多くが社会的に高い地位にある人物を中心に据えている理由の一つであろう。彼が被抑圧者の物語を描いたとしても、それが即ち被抑圧者の物語になるわけではないと Coetzee は考えているのだ。

[10] Dominic Head は、Norma の指摘は Elizabeth の主張に対してある程度有効であるが、Norma が意見の合わない義母 Elizabeth に対して冷たく接するという人物設定の故に読者は Norma よりも Elizabeth の主張に共感してしまい、そのことでもって読者は共感が理性を凌駕する経験をするのであると指摘している（"A Belief in Frogs" 110-11）。

[11] これは Coetzee の作品が南アフリカの現実に直面することなく、知的な遊戯に淫しているという非難を招いてしまうことに繋がった。Marais の指摘を参照（83-84）。非政治的に見える

Coetzee のテクストではあるが、その中に彼の政治的立場を読み取ることができるという点についても Marais を参照。

[12] Attwell は本論とは別の観点から Erasmus 論を読解している。彼によれば、Coetzee にとっては Elizabeth Costello というキャラクターを生み出すことこそが Erasmus 的解決なのである。Elizabeth は聴衆を笑わせるような存在ではないが、理性を批判し、そのような言説は Norma によって狂気と見なされることになるのである（"The Life and Times of Elizabeth Costello" 36）。

[13] このように、西欧的伝統の内部にいながら同時にその外部に位置しようとし、そこから西欧的伝統を捉え直そうとしている Coetzee の姿勢については、Rosemary Jolly も同様の指摘をしている（152-53）。

[14] しかし、この Coetzee の批判とは異なり、実は Beckett も存在を巡る問題意識を共有していることを田尻は論証している（『ベケットとその仲間たち』216-20）。また、同種の論証は "Beckett, Coetzee and Animals" においても見られる（Tajiri, "Beckett, Coetzee and Animals"）。

参考文献

Aaltola, Elisa. "Coetzee and Alternative Animal Ethics." *J. M. Coetzee and Ethics: Philosophical Perspectives on Literature*, edited by Anton Leist and Peter Singer, Columbia University Press, 2010, pp. 119-44.

Armstrong, Nancy. "The Affective Turn in Contemporary Fiction." *Contemporary Literature*, vol. 55, no. 3, 2014, pp. 441-65.

Attridge, Derek. *J. M. Coetzee and the Ethics of Reading: Literature in the Event.* The University of Chicago Press, 2004.

Attwell, David. *J. M. Coetzee and the Life of Writing*. Oxford University Press, 2015.

---. "The Life and Times of Elizabeth Costello: J. M. Coetzee and the Public Sphere." *J. M. Coetzee and the Idea of the Public Intellectual*, edited by Jane Poyner, Ohio University Press, 2006, pp. 25-41.

Coetzee, J. M. "Animals, Humans, Cruelty and Literature: A Rare Interview with J. M. Coetzee." *Satya*. May 2004, http://www.satyamag.com/may04/coetzee.html. Accessed 17 May. 2017.

---. "As a Woman Grows Older." *The New York Review of Books.* 15 Jan. 2004, http://www.nybooks.com/articles/archives/2004/jan/15/as-a-woman-grows-older/. Accessed 17 May. 2017.

---. "Eight Ways of Looking at Samuel Beckett." *Borderless Beckett. Beckett sans frontièrs.* Ed. Minako Okamuro, et al. Spec. issue of *Samuel Beckett Today / Aujourd'hui* vol. 19, 2008, pp. 19-31.

---. *Elizabeth Costello.* Secker & Warburg, 2003.

---. *Giving Offense: Essays on Censorship.* The University of Chicago Press, 1996.

---. *The Lives of Animals.* Edited by Amy Gutmann, Princeton University Press, 1999.

Coetzee, J. M, and Arabella Kurtz. *The Good Story: Exchanges on Truth, Fiction and Psychotherapy.* Harvill

Secker, 2015.

Dawn, Karen, and Peter Singer. "Converging Convictions: Coetzee and his Characters on Animals." *J. M. Coetzee and Ethics: Philosophical Perspectives on Literature*, edited by Anton Leist and Peter Singer, Columbia University Press, 2010, pp. 109-18.

Deckard, Michael Funk, and Ralph Palm. "Irony and Belief in Elizabeth Costello." *J. M. Coetzee and Ethics: Philosophical Perspectives on Literature*, edited by Anton Leist and Peter Singer, Columbia University Press, 2010, pp. 337-56.

Durrant, Sam. "J. M. Coetzee, Elizabeth Costello, and the Limits of the Sympathetic Imagination." *J. M. Coetzee and the Idea of the Public Intellectual*, edited by Jane Poyner, Ohio University Press, 2006, pp. 118-34.

Graham, Lucy. "Textual Transvestism." *J. M. Coetzee and the Idea of the Public Intellectual*, edited by Jane Poyner, Ohio University Press, 2006, pp. 217-35.

Head, Dominic. "A Belief in Frogs: J. M. Coetzee's Enduring Faith in Fiction." *J. M. Coetzee and the Idea of the Public Intellectual*, edited by Jane Poyner, Ohio University Press, 2006, pp. 100-17.

Jolly, Rosemary. "Going to the Dogs: Humanity in J. M. Coetzee's *Disgrace*, *The Lives of Animals*, and South Africa's Truth and Reconciliation Commission." *J. M. Coetzee and the Idea of the Public Intellectual*, edited by Jane Poyner, Ohio University Press, 2006, pp. 148-71.

Marais, Michael. "Death and the Space of the Response to the Other in J. M. Coetzee's *The Master of Petersburg*." *J. M. Coetzee and the Idea of the Public Intellectual*, edited by Jane Poyner, Ohio University Press, 2006, pp. 83-99.

Mulhall, Stephen. *The Wounded Animal: J. M. Coetzee and the Difficulty of Reality in Literature and Philosophy.* Princeton University Press, 2009.

Singer, Peter. "Reflections." *The Lives of Animals*. Edited by Amy Gutmann, Princeton University Press, 1999, pp. 85-91.

Smuts, Barbara. "Reflections." *The Lives of Animals.* Edited by Amy Gutmann, Princeton University Press, 1999, pp. 107-20.

Tajiri, Yoshiki. "Beckett, Coetzee and Animals." *Beckett and Animals.* Edited by Mary Bryden, Cambridge University Press, 2013, pp. 27-39.

Uhlmann, Anthony. "Excess as Ek-stasis: Coetzee's *The Master of Petersburg* and *Giving Offense.*" *Comparatist: Journal of the Southern Comparative Literature Association,* vol. 38, 2014, pp. 54-69.

J・デリダ、E・ルディネスコ『来たるべき世界のために』藤本一勇、金澤忠信訳、岩波書店、2003。

ジョルジョ・アガンベン『開かれ―人間と動物』岡田温司、多賀健太郎訳、平凡社、2004。

田尻芳樹『ベケットとその仲間たち―クッツェーから埴谷雄高まで』論創社、2009。

田尻芳樹「『サミュエル・ベケットを見る八つの方法』を読む」、岡室美奈子、川島健編『ベケット

を見る八つの方法』水声社、2013、pp. 37-50。
ダナ・ハラウェイ『伴侶種宣言―犬と人の「重要な他者性」』永野文香訳、以文社、2013。
中井亜佐子『他者の自伝―ポストコロニアル文学を読む』研究社、2007。

* 本論は、日本英文学会第 89 回全国大会（2017 年 5 月、静岡大学静岡キャンパス）における口頭発表の内容に加筆修正を加えたものである。